

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

シルクロードの織機

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-11-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉本, 忍, 柳, 悦州 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5212

枠機【IFJ-2】

調査年月日	: 1998年9月22日
調査地	: チェルゲルド (Chelgerd) 村
民族名	: バフチアリ (Bakhtiari)
型式	: 傾斜式枠機
材質	: 鉄, 木 (開口保持棒, 綜統棒, 綜統支持具, 経糸中継棒)
概寸	: 全高236cm, 全幅258cm
経糸保持方式	: 固定式
整経方式	: 擬似輪状整経式
開口具設置方式	: 開口保持棒可動式

構成部品

機枠	: <図IFJ-2-a-1>
経糸保持具	: 上部経糸保持棒 (横木) <図IFJ-2-a-2> 下部経糸保持棒 (横木) <図IFJ-2-a-3>
経糸間接保持具	: 経糸張力調整用ネジ金具 (2本) <図IFJ-2-a-4>
経糸中継棒	: <図IFJ-2-a-5>
開口具	: 開口保持棒<図IFJ-2-a-6>
緯入具	: 板金状緯入具 (太い緯糸用) <写真IFF-4-1-a>と同様
緯打具	: 櫛状緯打具 <写真IFJ-1-1-b>と同様
緯打補助具	: 緯糸打ち締め糸
経糸整列具	: 輪状綜統型経糸整列具 <図IFJ-2-a-7>
開口部記憶紐	: <図IFJ-2-a-8>
その他	: パイル糸切断用ナイフ

製織中の織物

織技法	: パイル織
地組織	: 平織変化組織
素材	: 羊毛
用途	: カーペット
経糸全長	: 470cm (全周)
織幅	: 206m

織り手 : 女性 3人

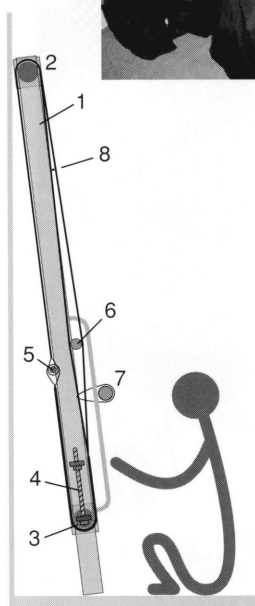


調査メモ

枠機は、住居室内の壁に立てかけられており、機織りは床に座っておこなわれていた。開口具としては開口保持棒があるだけで、輪状綜統と見える部品<図IFJ-2-a-7>は、輪状綜統型経糸整列具として機能している。開口保持棒の設置方式は開口保持棒可動式であるが、経糸の実際の開口操作では、開口保持棒はほとんど動かされることはない。この枠機の機織りには、太い緯糸と細い緯糸が使われており、これらの緯糸を使用した機織りの操作については、先に提示した枠機【IFF-4】の場合と同様である。なお、パイル織の糸の結びはトルコ結びであった。



IFJ-2-1 全景



IFJ-2-a 構造図

参考資料：巻き編用枠機【IFJ-3】

調査年月日 : 1998年9月13日
 調査地 : タブリーズ (Tabriz) 市
 民族名 : ペルシア (Persia)

型式 : 傾斜式枠機
 材質 : 木, 鉄 (ジャッキ)
 概寸 : 全高160cm, 全幅120cm
 経糸保持方式 : 固定式
 整経方式 : 擬似輪状整経式
 開口具設置方式 : 開口保持棒可動式

構成部品

機枠 : <図IFJ-3-a-1>
 経糸保持具 : 上部経糸保持棒 (横木)
 <図IFJ-3-a-2>
 下部経糸保持棒 (横木)
 <図IFJ-3-a-3>
 経糸間接保持具 : 経糸張力調整用ジャッキ
 (2本) <図IFJ-3-a-4>
 経糸中継棒 : <図IFJ-3-a-5>
 開口具 : 開口保持棒 <図IFJ-3-a-6>
 経糸整列具 : 輪状綜統型経糸整列具
 <図IFJ-3-a-7>
 開口部記憶紐 : <図IFJ-3-a-8>

製織中の織物

技法 : 巻き編 (スーマク)
 地組織 : 巻き編組織
 素材 : 羊毛

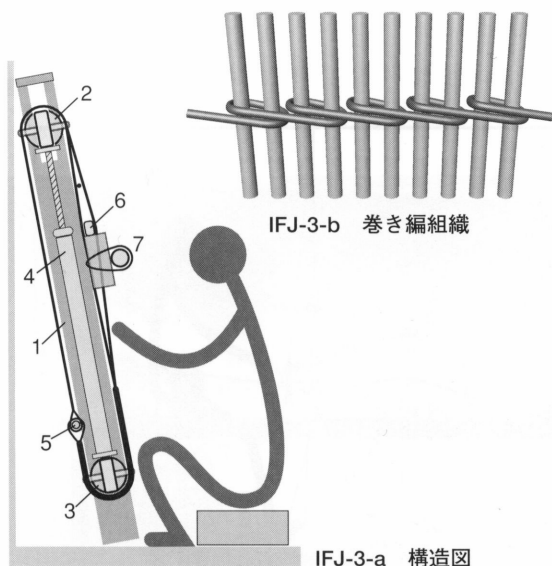


用途 : カーペット
 経糸全長 : 290cm (全周)
 織幅 : 100cm

織り手 : 女性1人

調査メモ

タブリーズ市内の工芸研修所で使われていた、この枠機の構造は、【IFJ-1】や【IFJ-2】の枠機と、共通しているが、この枠機では、織物ではなく、巻き編組織のカーペットが作られていた。枠機の内側には、経糸の張力調整ジャッキ2本が取り付けられており、上部経糸保持棒の高さを変えて経糸の張力を調整する仕掛けとなっている。開口具としては、開口保持棒があるだけで、輪状綜統と見える部品<図IFJ-3-a-7>は、輪状綜統型経糸整列具として機能している。開口保持棒の設置方式は開口保持棒可動式であるが、開口保持棒はほとんど動かされることなく、織り手は、2本の経糸を指ですくい取り、緯糸をループ上に巻きつけながら編むという技法 (スーマク) のみによってカーペットをつくっていた。



IFJ-3-1 巻き編用枠機

高機【ITF-1】

調査年月日	: 1998年9月11日
調査地	: ターゼ・アーバード (Tazeabad) 村
民族名	: タリシュ (Talysh)
型式	: 高機
材質	: 木
概寸	: 全長264cm, 全幅83cm, 全高190cm
経糸保持方式	: 固定式
整経方式	: 平整整式
開口具設置方式	: 綜統可動式

構成部品

機台	: <図ITF-1-a-1>
経糸保持具	: 経糸保持棒<図ITF-1-a-2> 布巻き棒<図ITF-1-a-3> <写真ITF-1-3-a>
経糸間接保持具	: 布巻き制御棒 <図ITF-1-a-4><写真ITF-1-3-b> 布巻き保持具 <図ITF-1-a-5><写真ITF-1-3-c>
開口具	: 番目綜統 (2枚1組) <図ITF-1-a-6>
開口補助具	: 滑車<図ITF-1-a-7> <写真ITF-1-5> 踏み木<図ITF-1-a-8> (2本)
緯入具	: 杼<写真ITF-1-2>
緯打具	: 箴<図ITF-1-a-9>
緯打補助具	: 腕木<図ITF-1-a-10>
その他	: 座板<図ITF-1-a-11>

製織中の織物

織技法	: 格子縞織
地組織	: 平織組織
素材	: 羊毛
用途	: 礼拝用敷布
経糸全長	: 1000cm以上
織幅	: 45.5cm

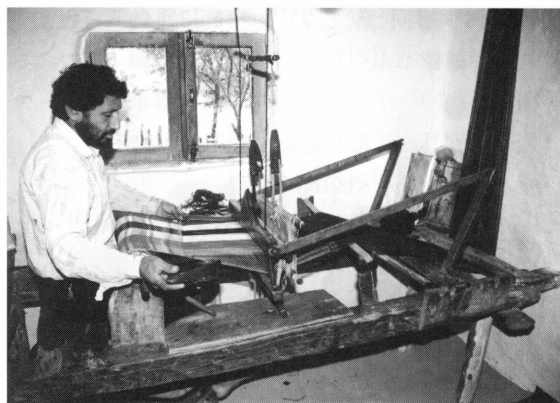
織り手 : 男性 1人

調査メモ

高機は、住居室内に置かれており、男性が座板に腰

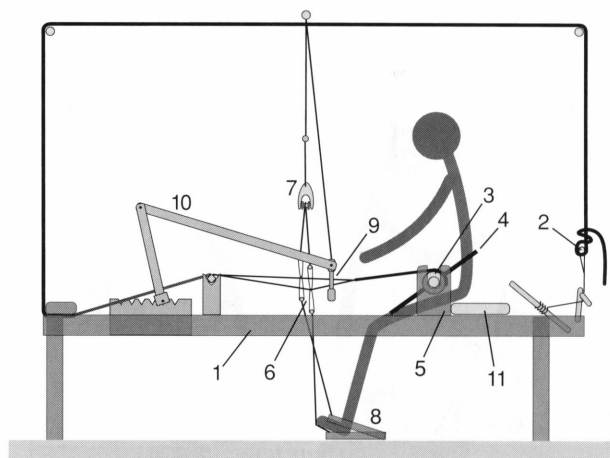


掛けて機織りをしていた。この機織りでは、外部からの注文とともに持ち込まれた糸を使って、イスラームの礼拝のさいに用いられる敷布が織られていた。調査地周辺では、高機はこの1台があるのみということであった。高機にかけられた経糸は、先に行くにしたがって次第に幅を狭め、天井に渡された2本の横木を介して、織り手の背後で先端部経糸保持棒に束ねた状態でくくられている。そして、この先端部経糸保持棒は、機台の後部に取り付けられた棒と紐で繋いである。



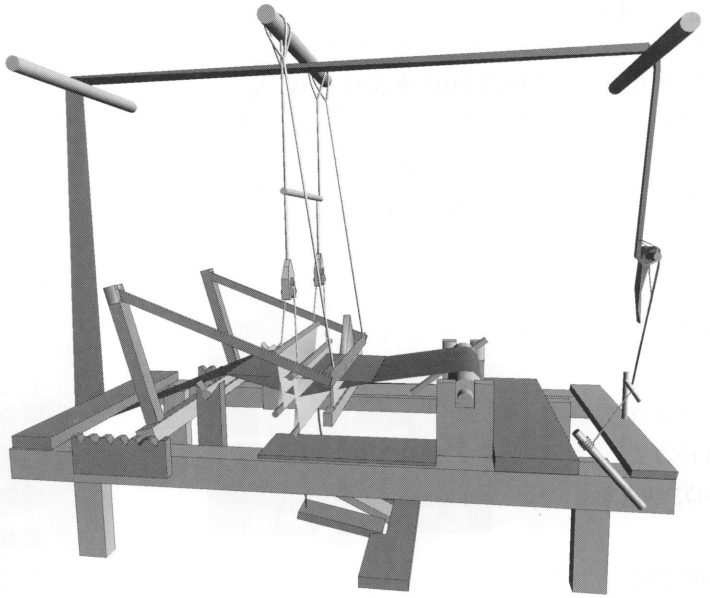
ITF-1-1 全景

ITF-1-a 構造図

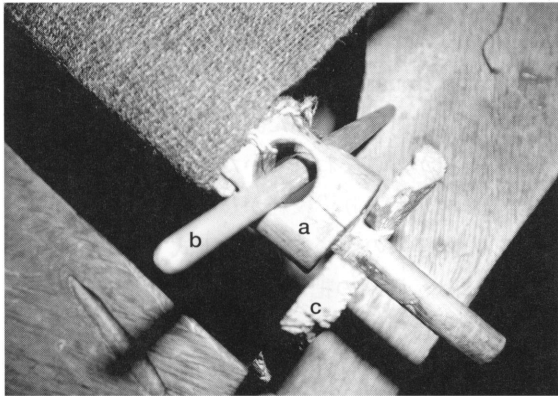




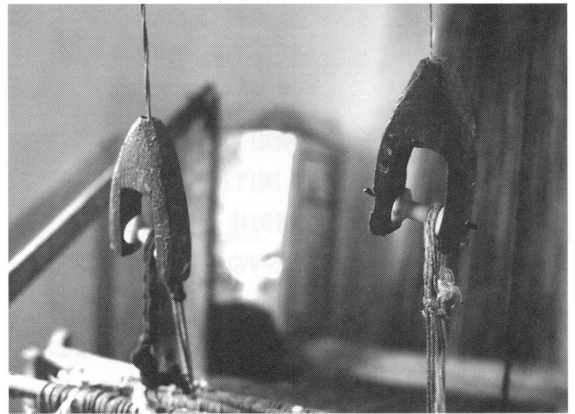
ITF-1-2 杼



ITF-1-b 模式図



ITF-1-3 布巻き棒-a, 布巻き制御棒-b, 布巻き保持具-c



ITF-1-5 滑車



ITF-1-4 踏み木



ITF-1-6 製織された格子縞の織物

高機【ITF-2】

調査年月日 : 1998年9月19-20日
 調査地 : カーシャーン (Kashan) 市
 民族名 : ペルシア (Persia)

型式 : 高機
 材質 : 木
 概寸 : 全長300cm, 全幅130cm, 機枠
 全高177cm

経糸保持方式 : 垂下式
 整経方式 : 平整経式
 開口具設置方式 : 綜統可動式

構成部品

機台 : <図ITF-2-a-1>
 経糸保持具 : 経巻き棒 1 (地経用)
 <図ITF-2-a-2>
 経巻き棒 2 (紋経用)
 <図ITF-2-a-3>
 布巻き棒<図ITF-2-a-4>
 経糸間接保持具 : 縦巻き棒制御棒<図ITF-2-a-5>
 錘り 1 <図ITF-2-a-6>
 錘り 2 <図ITF-2-a-7>
 滑車 1 <図ITF-2-a-8>
 布巻き制御棒<図ITF-2-a-9>
 開口具 : 番目綜統 (5枚) <図ITF-2-a-10>
 開口補助具 : 滑車 2
 <図ITF-2-a-11><写真ITF-2-2>
 踏み木 (5本) <図ITF-2-a-12>
 緯入具 : 杼<写真ITF-2-3-b>
 緯打具 : 箠<図ITF-2-a-13>
 経糸整列具 : 綾棒 1 (4本) <図ITF-2-a-14>
 綾棒 2 (2本) <図ITF-2-a-15>
 パイル経分離棒 : <図ITF-2-a-16>
 幅出し具 : 伸子<図ITF-2-a-17>
 その他 : 座板<図ITF-2-a-18>
 パイル糸切断用ナイフ
 <写真ITF-2-3-a>
 パイル用ルール<写真ITF-2-4>
 パイル糸プレス棒
 <写真ITF-2-6-a>
 パイル糸プレス用下敷き板
 <写真ITF-2-6-b>



製織中の織物

織技法 : ビロード織
 地組織 : 綾織組織
 素材 : 絹
 用途 : 織り見本
 経糸全長 : 2000cm以上
 織幅 : 43.5cm

織り手 : 男性 1人

調査メモ

この高機は、カーシャーンの伝統工芸センター (Markaz-e Honarha-ye Sonnati, Kashan) の半地下の展示室に設置されていた。この高機では、ビロード織の実演がおこなわれていた。経糸には、地経と紋経の2種類があり、紋経がパイル糸として使用されていた。経糸の保持方式は垂下式で、地経用の経巻き棒には、両端の把手から石の錘りが吊るされ、紋経用の経巻き棒の下端には石を袋詰にした錘りが吊るされていた。開口具は5枚の番目綜統で構成されているが、奥にある4枚は地経用の綜統で、手前にある1枚は紋経 (パイル用の経糸) 用の綜統として機能している。ただし、後者の紋経用の綜統は、一般的な番目綜統とは異なっており、専門的には無双綜統と呼ばれてきたタイプの番目綜統である。この高機で織られていたビロードの地組織は、綾織組織 (3/1の綾) である。また、ビロードを織るための操作としては、機織りの作業工程の中で、地組織を構成する緯糸が通されるたびに、紋経を上、地経を下とした開口部に、断面がU字形の細かいパイル用ルール1本が挿入される。そして、2本目のルールを挿入し終わったあと、先に挿入したルールのU字形の溝にナイフを走らせてパイル糸を切断するという作業が繰り返される。なお、この機織りの作業工程では、30cmあまりの長さを織ると、そのたびに機

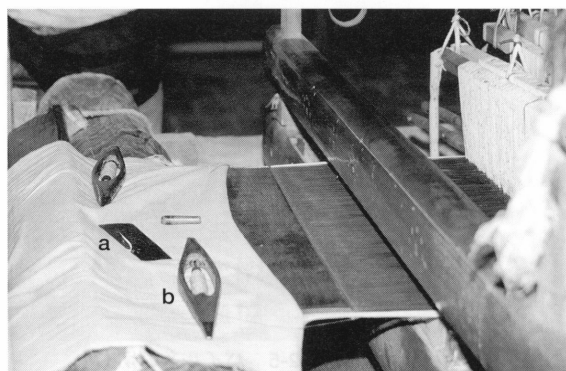
織りを一旦中断して、ピロードの布面に模様付けがおこなわれていた。これは、布の下に下敷きとなる板を挿し込み、その後に、パイル糸プレス棒の細く丸みを帯びた先端部で、布面を渦巻状に円を描くように強く擦り、パイル糸を寝かせ付けるというもので、この作業の繰り返しによって、布の全面に丸紋が模様となってあらわされていた。



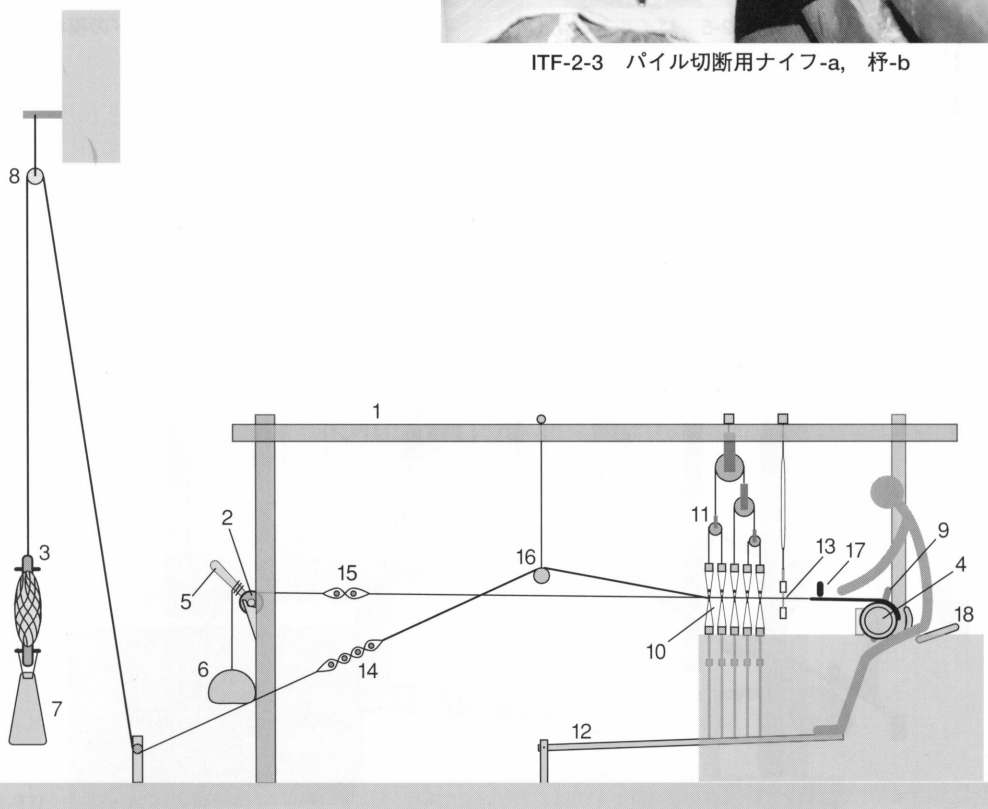
ITF-2-2 高機側面



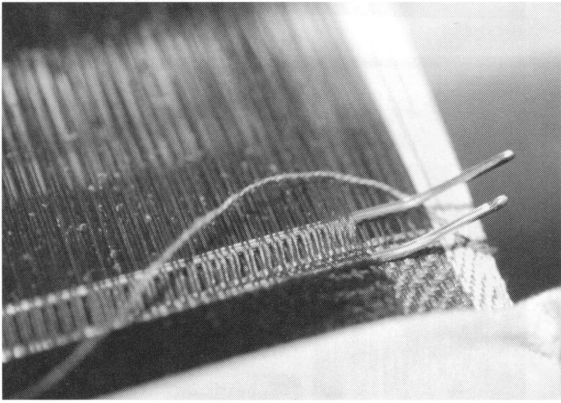
ITF-2-1 全景



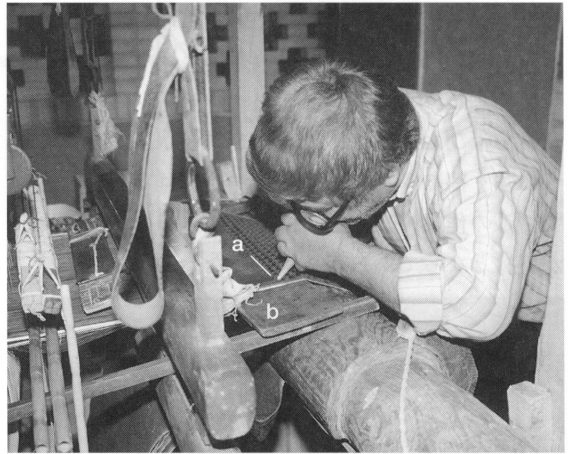
ITF-2-3 パイル切断用ナイフ-a, 杼-b



ITF-2-a 構造図



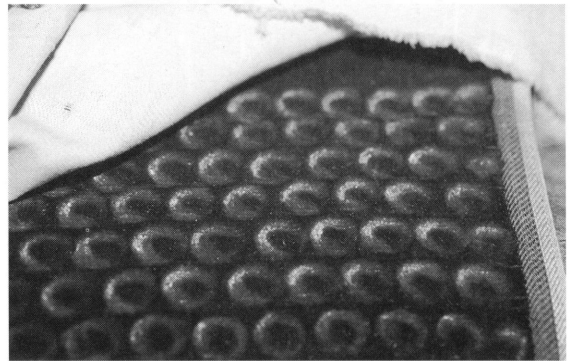
ITF-2-4 パイル用レール



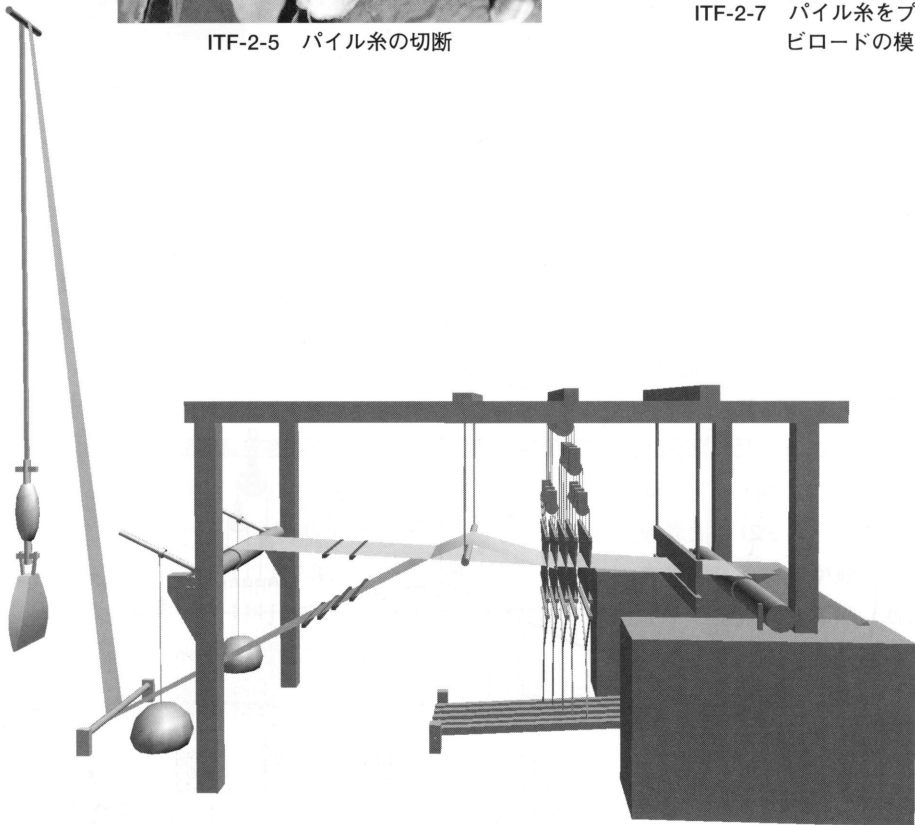
ITF-2-6 パイル糸のプレス
パイル糸プレス棒-a,
パイル糸プレス用下敷き板-b



ITF-2-5 パイル糸の切断



ITF-2-7 パイル糸をプレスしてあらわされた
ビロードの模様



ITF-2-b 模式図